

「当麻曼荼羅縁起絵巻」の制作意図をめぐる一試論

成原 有貴 (学習院大学)

「当麻曼荼羅縁起絵巻」(全二巻、光明寺蔵、以下本絵巻)は、横佩大臣の娘(本願尼)が化尼(阿弥陀の化身)とともに蓮糸で浄土の曼荼羅を完成させ往生する、当麻曼荼羅の由来を描く作品である。成立は詞書と縁起諸本の対照から13世紀中頃と推定され、同時期の浄土宗西山派の証空による曼荼羅の宣揚やこれに関連した曼荼羅厨子の修理に九条家周辺の人々が結縁したことから、制作には証空や九条家が関与したと推定されている。さらに、主題等から見て同家に縁の女性が発願者であろうとされる。本発表では先行研究を承け、これまであまり論じられていない制作意図について考察を行う。

縁起を絵画化した鎌倉時代のもとの作例は、本絵巻以外に当麻寺蔵の二幅本と清浄心院蔵の一幅本が知られるが、本絵巻には掛幅本の縁起とは異なる表現がいくつか認められる。本発表ではなかでも特に、下巻第二段・第三段の曼荼羅を懸架する建物の描き方に着目し、これを制作意図の問題に関連づけて論じる。

まず、下巻第二段の建物について見る。完成した曼荼羅の前で本願尼が化尼の講説を聴く場面であるが、建物は造りから判断して当麻寺曼荼羅堂ではなく、貴族の邸内の持仏堂として描かれていることが、建築史研究者との共同研究から明らかになった。従来、この建物の性格が特に問題の俎上に上ることはなかったが、曼荼羅の所在の場の性格は、本絵巻の縁起の解釈や制作意図を探る上で看過できないと考える。他の作例を参照するならば、寺家の立場の反映が指摘されている当麻寺蔵二幅本では、曼荼羅の懸る建物を内陣と外陣からなる当麻寺の曼荼羅堂として表わす。これに対し、本絵巻の下巻第二段では貴族女性の持仏堂として描き、必ずしも当麻寺と曼荼羅とが堅固に結び付けられているわけではないとわかる。かような志向は、本絵巻詞書と縁起諸本との比較からも浮上する。すなわち、詞書の底本と目される仁和寺蔵の縁起では曼荼羅の所在を当麻寺とするのに対し、詞書には当麻寺を示唆する言葉が明記されていない。次に、第三段の建物について見る。本願尼のもとに阿弥陀が来迎する場面の建物は、造りから見て先の第二段と同じであり、絵では阿弥陀は寺ではなく、曼荼羅を懸けた女性の持仏堂に来迎することがわかった。

以上から本絵巻には、曼荼羅を制作し信仰するならば、当麻寺に限らず、曼荼羅のある所にこそ阿弥陀が来迎し往生が可能となる、との主張が窺われる。これは、曼荼羅を転写し当麻寺の外にも広めた西山派の立場とも矛盾せず、やはり同派と本絵巻の関連が考えられよう。また先行研究では、本絵巻が当麻寺に施入されたとみる説もあるが、以上の絵の表現から推察するならば、発願者の高貴な女性が本絵巻の主人公のごとく曼荼羅を制作し、これを自身の信仰空間に懸け、絵巻も身近におき、その後何らかの契機を経て当麻寺に謹納した可能性も想定しうるのではなかろうか。